

# 蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆  
近藤真弘

〒940-0052  
長岡市神田町1丁目4番10  
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆  
小林国二・高橋 潔・屋代 健  
太田匡哉・山内芳次・近藤龍弘  
近藤マリ子・近藤久美子

印刷・株式会社中央印刷



ホームページ



Instagram

## 『百尺竿頭進一步』

泰忍 弘

あけましておめでとうございます

本年もよろしくお願い致します



年明けというのは毎年迎えますが、自身の人生において一つの節目でございます。人生において節目というのはそ

れぞれあります。年齢を重ねる誕生日、学校の入学や卒業、結婚その他様々あるかと思えます。

「節目」という言葉を辞書で調べると「①竹や木の節のある所。②物事のくぎれ目。節。」とあります。  
竹や木とありますが節が分かり易いのはまさに竹ではないでしょうか。  
竹には規則的に節があり、節のおかげで長く伸びる竹は折れることなく成長します。また、節のおかげで丈夫な竹は様々な活用の仕方があります。雪国では降り積もる雪から木々を護るのも丈夫な竹を使った囲いのおかげです。  
人生の節目は楽しく嬉しいことだけではありません。辛く悲しい出来事が節目となることも当然ございます。ただそれら多くの節目があることにより自身の心が強くなり、成長の上で支えになつていくのではないかと考えます。  
竹と聞いて思い出す禅語に『百尺竿頭進一步(ひやくしゃ

くのかんとうにいっぱをすむ)』という言葉があります。  
この言葉は、中国は唐代の禅僧、長沙景岑の言葉で、「無門関」あるいは「景德伝灯録」という禅籍に記述されています。  
「百尺竿頭」というのは直訳すると三十メートルの竿の先ということ、「進一歩」とは一歩を進むという事なので、何やら危険な意味になります。  
ここでいう百尺竿頭というのは仏向上事の境界のことをいいます。つまり「悟り」の境界と、その修行の過程ということですね、自身がその到達点に達したと思つたときにそこに安住しその場に執着するのではなく、そこから更に一歩を踏み出す覚悟が必要である。という事です。  
この教えは決して修行する



安善寺亀甲竹

僧侶の為だけの教えではありません。  
皆さんも人生の中で様々な区切りをつけて満足することがあるかと思えます。「こまでやったから」「これだけ尽くしたから」当然何事も行つてきた過程と結果は大切です。ただそこで立ち止まり終わるのではなく、生きている限り、今日が一番新しい修行の日という気持ちが必要です。  
百尺竿頭進一步とは何かを成し遂げた人の言葉ではなく、人生を生き続ける人全てに対する言葉です。  
立ち止まることなく更に一歩を進むことにより新たな節ができ、自身の人生がより強く豊かになると同時に周りにはいる人々の支えになるのではないのでしょうか。

ご家族の皆さままでご覧下さい

# 〔続 安善寺の歴史〕

## 連載 第三回

# 堀直奇と長岡誕生の物語

昌興寺住職

石田 哲彌

### (3) 堀直奇の目論み（壮大な都市計画）

〔戦国時代における最強な城郭の縄張りとして自由商業都市の建設を目指す〕 新進気鋭の堀直奇はかつて豊臣秀吉のもとで時代の先端をいく政治を学んできました。中でも日本の台所、大阪と貿易湊の堺との関係は印象深いものでした。大阪城は淀川の水堀に囲まれた堅固な城塞であり、淀川が結ぶ貿易港、堺によって物流の拠点となっていました。大阪はこのように日本における時代の先端を走っていました。若くして大阪城に豊臣秀吉のもとで教育を受けてきた直奇の脳裏には、こうした状況が心の底にまで深く染み込んでいたのです。そして、自由な交易が、いかにその地域を発展させ、庶民の暮らしを豊かにするかを目の前で実感してきたのです。

蔵王堂城の城主となる。そして、蔵王堂城に替わる新しい城を建設する。新しい城のすぐ傍には大河、信濃川が控え、その上流は信濃（長野県）と結び、下流は日本海の玄関口、新潟港と結ぶ。しかも長岡は信濃川を遡（さかのぼ）ることで、70から80キロメートル。いかなる船も、この長大な距離を遡って長岡城を攻めることは不可能である。長岡城が難攻不落であるもうひとつの理由は、こうした好条件を抱えていたからである。そして、ひとたび日本海に出れば、北海道から九州に直結する。場合によっては諸外国とももの交流も可能である。なんと大阪と堺との関係にそっくりではないか。

このような素晴らしい地は、広い日本でも長岡をおいてどこにあるか。まさに京、大阪に匹敵する最高の適地であることを直奇は改めて発見したのでした。

そこで、彼は大阪の都に匹敵する長岡に、城と城下町を一体化した鉄壁な守りの城を築き、その一方、関東および関西に通じた幹線道路（大動脈）を整備し、城域外に楽市楽座（自由交易都市）を設けることにしたのでした。「長岡に楽市楽座が開かれた」とことが知られば、たちまち日本全国から商人が集まるであろう。そして全国の各地で作られた産物が長岡に集まる。その一方では越後・信濃の水産物や農産物は逆に日本各地に行き渡る。まさに長岡は物流の拠点となり、大阪のような日本の台所となるに違いない。

もしかしたら彼は、長岡がセーヌ川河岸の花の都、パリののような雄大な都になることを夢見ていたのかもしれない。

時空を越えて「長岡京」が復元。「長岡の地名」の発見が、いかに大きな働きをしたのか、改めて認識していただきたいのではないかと思います。

### 【2】長岡城の築城

(1) 築城当時と現在の町並みの比較

長岡城の築城と城下町の造成は慶長7年（1602）に始まり、元和4年（1618）に終わる。途中、飯山城主となり、7年ほどブランクがあったので、実質的には9年の歳月をもってなされたといえましょう。

元和4年（1618）に描かれたという長岡城と城下町の図面、「越後国古志郡之内長岡城（旧内閣文庫所蔵）」が手元に存在する。その図面には侍屋敷、町屋などの記載はあるが、住人の名前はまだない。つまり、堀直奇の時代に設計された図面であり、やがて牧野家の家臣や町人が入ることによって、ようやくその名前が埋まる。その直前の図面でした。

ところが、その図面を詳細に確認してみると、驚くべきことが明らかになりました。

というのは、現在の地図と比較してみると、江川をはじめ町割りや町並みが、ほとんど現在と変わっていないということです。

戦国時代の城下町といえば、敵の侵入を防ぐためにジグザグとした鍵型の通りにし、方向を次第に変えて最後は思いがけない場所に出るようにしたり、道が次第に細まり最後は袋小路になる、といったように、あらゆる工夫や仕掛けが凝らされてきました。

しかし、長岡の城下町は、そうした作為が全く見られない。それどころか、まるで京都の町並みのように整然とした碁盤の目となっていたのです。場所によっては横道がハシゴ型、あるいは鍵型となっている所もありますが、それもまたおもしろい。

皆様もぜひ一度試しに、付近の道を歩いてみて下さい。たとえば安善寺様付近の道を歩くだけでも十分にそれがわかります。

堀直奇は「長岡は将来、京のような都（政治の中心）」と



なる」ことを、当初から計算に入れて町造りをしていた。真剣に町の将来を考え、庶民の幸福を願っていたのでした。それが、身近な町割りや町並みを歩いて実感するのです。町歩きをして堀直奇の心を実感してみよう。堀直奇の心の実体験は町並みの探索から…。

## (2)築城工事の現場

長岡城の新築、城下町の町割、水堀となる川の築堤、そして「長岡渡し」の港湾整備と、諸工事に多くの人夫が携わりました。その工事現場の状況は一体どうだったのでしょうか。興味津々です。具体的に覗いてみましょう。幸いにして『温古の葉』に、その工事状況が掲載されていたので、その一部分を紹介しましょう。

1. 仕事…毎朝6時に始まり、夕方6時に終わる。
2. 人足の休み…昼前2度。午後2度。版木で合図をする。
3. 振る舞い…上がりに男は親腕にて、女は汁腕にて

酒1一杯。煮付け鯨を3本あて給う。

4. 扶持米…男は一日、黒米1升8合。菜代、銭5文。女は黒米1升2合、菜代、銭3文。

当時としては申し分のない働き場所ではなかったかと思えます。特に酒は祭事にしか飲めない貴重品でした。それを毎日飲めるなんて…、人夫にとつてはまさに極楽ではなかったかと思えます。さらに女性にも男性同様、酒が振る舞われたのです。これには驚きでした。鯨にしてもそうです。北海道とれる鯨をどうやって手に入れていたのでしょうか。その貴重品をなんと毎日食べられるのですから、嬉しいやら、有り難いやら、まれまた極楽気分ではありませんか。

堀直奇という人々は、よほど心根の優しい人だったんですね。いつも威張り散らして、肩を怒らせて歩くお役人さんとは一味違った殿様だったことがよくわかります。

実は、こうした酒をはじめ物資の調達は、後に長岡の検

断となった草間茂右衛門の粉骨碎身の懸命なる働きによるものでした。ご存じ、草間医院のご先祖です。

## (3)草間茂右衛門と妙徳院（本庄廣次）

茂右衛門は上杉謙信の育ての親、執政として活躍し、「隠れた逸材」と謳われた本庄実乃の孫でした。御館の乱で栃尾城が落城するときに妙徳院（本庄廣次）とともに落ち延び、各地を巡ったあと郷里、蔵王堂に舞い戻ってきたのでした。そしてたちまち財をなし、わずか20代で蔵王堂の代官となりました。その手腕を買われて長岡城築城における現場の総監督に抜擢されたのです。

なお、姉さんは絶世の美女と謳われた有名な「妙徳院」。二代將軍、徳川秀忠に見初められ、相思相愛の仲となりました。そして生まれたのが和子姫です。和子姫は後水尾天皇の妃となって入内。後の東福門院和子です。修学院離宮を築庭や国宝「鳥獣戯画」を修復したことは有名です。そして、二人の間に生まれた姫

は第109代 明正天皇（女帝）となりました。

武士の家系から入内したのは歴史上、妙徳院の娘、東福門院和子のみであります。しかも、その子供は明正天皇となる…。

長岡市は妙徳院や皇后の東福門院和子、そして明正天皇を生み出した日本で唯一の市です。というのに、なぜ、こうした重大事を大切にしないのでしょうか。不思議でなりません。というか、さみしい…。

かくして、堀直奇の目論んだ立派な城が完成しました。そして、今日まで変わることのない、碁盤の目の城下町も

誕生したのであります。まさに堀直奇は長岡の歴史にとつて忘れがたき貴重な存在といえませんか。

元和4年（1618）、堀直奇は長岡城と城下町の完成をみて、村上城に移封されました。欲をいえば、もう少し彼に任せなかった…。彼の力によって、長岡はどのような町になったのか。惜しみて余りある移封でした。

彼が長岡を去ると同時に、総合設計事務所の安善寺も閉鎖されました。そしてまた、もとの静かな安善寺に戻ったのでした。長い間、ご苦労さまでした。いまから407年前のことであります。



妙徳院廣次上人正善靈神碑 蔵王安禪寺境内



## 【特集】

## 「食」

静岡県

可睡斎 典座

小金山 泰玄

時が経つのは早いものです。私も後期高齢者の仲間入りになりました。

精進料理に縁をいただき半世紀が経ちました。御本山(總持寺)の典座を経て、現在静岡県可睡斎の典座を務めさせていただいております。

食事を作ることに携わり、皆様方に召し上がっていただくことの大切さを担っておりますが、昨今日本の食事風景には目を見張るものがあります。食事を頂く姿勢、心得等大切なことが欠如している感じがします。

私達曹洞宗には道元禪師が示して下さった食事に対して厳しい教えがあります。食事を作る心得「典座教訓」、食事をいただく心得「赴粥飯法」です。

私達はこの教えを守りながら、すべての食材に気を配り、大切に扱います。一茎草も粗末にせず調理して捨てないこ

とです。私たちの命もこれに依って生かされているのではないのでしょうか。食事をいただく側も同じです。作って下さった人の事を思い感謝していただく、自分が食べるのではなく、色々なすべての命をいただくのです。そうすれば身体も心も健康に養われていくのではないのでしょうか。



可睡斎の精進料理



## 「典座」とは

「典座」：禅宗寺院において食事全般を司る責任者。総料理長。禅寺において大切なお役である六知事の一人。

喜びの心を持って生活する

## 「喜心」

思いやりの心を持って生きる

## 「老心」

何事にも惑わされず正しく生きる

## 「大心」



精進のおせち料理3段

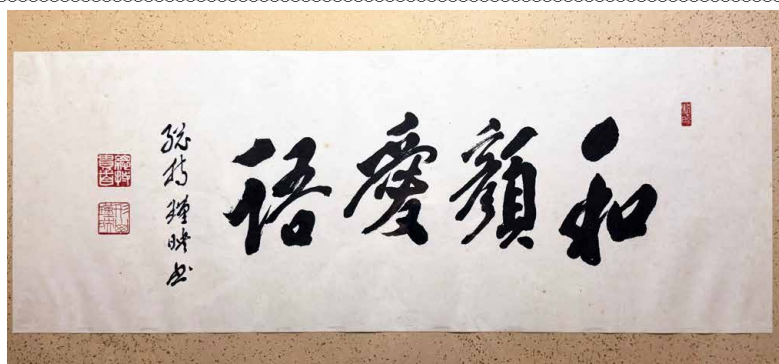
## 「和顔愛語」

揮毫

乙川瑾映 禅師

(明治三十五年～昭和五十七年)

和顔愛語とは、にこやかな表情と優しい言葉で人に接すること。相手を思いやる態度そのものが、周囲を和ませ、日常の一言が人の心を明るく照らすという教えです。



シリーズ  
安善寺墨蹟紹介  
①



## 東堂和尚のつぶやき

### 「旧暦での正月、桃の節句等々。日本の季節にあっている」



境内の落ち葉

安善寺の境内の木々も秋になると落葉樹は紅葉・黄葉が進み、晩秋から初冬には多くの落葉が始まります。一陣の風の落葉時雨は春の「花吹雪」に匹敵する程で、ついつい見とれてしまいます。又、役目を終えて大地へと帰った落ち葉が作り出す光景にも違った趣深い美しさがあります。

しかし境内地の落ち葉はそのままにしておくわけにはいかず掃き掃除が必要です。長岡の十一月以降は雨の日が多く、晴れた日は山内総出で掃き掃除、一回の掃除でゴミ袋が何十袋にもなります。最後はシルバー人材センターの

方々から総仕上げをしていただき、境内の木々の一年が終わります。俳句の季語に「山眠る」がありますが、「境内地の木々眠る」で来たる春にそなえて静かに休んでいるかのようなのです。

令和八年の正月を迎えました。今年も宜しくお願い申し上げます。

昨年十二月二十二日の冬至より僅か十日で正月。日の出も遅く「迎春」「新春」といわれても春はまだ遠く、毎年正月が一ヶ月くらい後だとよいのと思います。日本では旧暦の太陰太陽暦が明治五年十二月二日をもって終了とな

り、翌日から現在の太陽暦（グレゴリオ暦）の明治六年一月一日となりました。アジア圏では中国、ベトナム、モンゴル等々、多くの国で「旧正月」が休日や祝日になっていることが多く、家族が集まり、先祖を敬い、新年の繁栄を願う新暦の正月よりも盛大に祝う伝統があるそうです。日本でも地方では戦前まで旧正月を祝う地域が多く存在したそうです。令和八年の旧暦での正月は二月十七日です。

日本古来の旧暦や「二十四節気」では今でも立春、春分など季節を表わす言葉として用いられており、今年の立春は二月四日、桃の節句は四月十九日、端午の節句は六月十九日、お盆は八月二十五日、二十七日、中秋の名月は九月二十五日等々。こうしてみると現在の暦の約一ヶ月遅れの年中行事が日本の季節、文化に合っているように思われます。



新春飾り

## 安善寺よろず掲示板

### 『寺行事予定』

元旦 新年大祈禱

檀中一般年賀来山

一月一日〜三日

三朝祈禱

一月十八日

初月忌総代・世話人会

人會

二月十三日

(今年のみ二年の日に変更)

吒枳尼尊天初午大

祭典



## 安善寺 庭園型樹木葬『翠緑の小径』

- お盆に樹木葬墓地で御法要
- お盆に樹木葬墓地で御法要
- お盆に樹木葬墓地で御法要
- お盆に樹木葬墓地で御法要
- お盆に樹木葬墓地で御法要
- お盆に樹木葬墓地で御法要
- お盆に樹木葬墓地で御法要
- お盆に樹木葬墓地で御法要



【お問合せ】株式会社 放光  
フリーダイヤル 0120-811-112

安善寺 樹木葬墓地ご案内ページ  
<https://anzenji-jyumokusou.com/>



## 仏さまのおすそわけ 数珠つなぎフードパントリー

～誰ひとりとり残されない世の中に！お寺を提供の場へ～

食材や日用品の提供にご協力ください！！



\* 詳細はお寺にお尋ねください \*

協力：新潟県フードバンク連絡協議



キャットタワーも冬仕様にゃ〜ん！



## 窓から見る境内の

## 景色が大好きにゃ〜ん！



庭の木々が色づいていたかと思つたらあつという間に丸裸になってしまい、冬の寒さを一層強く感じさせられます。それでもスカスカになつた木々の間からは夏よりも遠くの景色が見られてそれはそれでワクワクするのです。

窓からぬくぬくと境内を眺めている私たちとは違い、家族は寒空の下、汗をかきなが

ら大量の落ち葉掃きに奮闘する毎日を送っていました。掃き掃除の中でも一番大変な木がイチヨウだそうです。紅葉の時期、門前のイチヨウは美しい黄色の絨毯を創り出してくれます。

しかし掃除となるとその実が曲者らしいのです。久美さんはその実を見るたびに、何かの行持の際にお檀家様に配

ればいいなど考えているそうです。

イチヨウの木は水分を多く含む木で難燃性と言われている、防火に役立つためにお寺の境内にはよく植えられるそうです。安善寺では初午の際に火防のお札をお渡ししているの、その際に一緒に配れば、などと毎年考えるだけなかなか実行に移せない久美さんです。

『有言実行』、久美さんの代わりににゃんにゃん日記で書いたので今年こそ銀杏作りをしてみたいものです。まあ今の久美さんは真人君の受験が終わるまでは次のことを考えている余裕もなさそうです。私とビビの今年のやりたいことナンバー1は庭への脱走！と言いたいところだけれどとりあえずリードで散歩かな。外の世界をみたいニャ〜ん。

## お便り原稿用紙

皆様からの原稿をお待ちしております。

## 原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。

FAX 0258-32-2870

〈原稿送付先〉メール info@anzenji-nagaoka.com

HP にも申込フォームがあります

## 編集 雑感

新年明けましておめでとうございます。本年も変わらぬご愛読を宜しくお願い申し上げます。年が明けると軽快な足音を響かせての御馬の登場です。

二千二十六年（令和八年）の干支は丙午です。昔は丙午は余り良くない年と言われており、昨年九州で大火、香港でも大火と丙午でなくとも大火に見舞われました。丙は「炎のように燃え広がる火」午も「真夏の火」を意味するからです。火の力が重なる干支とされ、勢いの強さや激しき情熱を象徴するといわれて来ました。かつては「力が強すぎて制御できない」

丙午の年は火災が多い」などと考えられ六十年に一回の危険な年とされた時期もありました。早い話が日本の家屋は燃えやすいので特に戒めとして伝承されています。火の用心はいつもの事です。

丙午十二支が「午」で十干が「丙」となります。午年は古くから成功や商売繁盛のシンボルとされており、活発でエネルギーッシュな年になると言われています。しかも今年は六十年に一度巡ってくる干支です。「丙」は炎のように燃え広がる火であり「午」も真夏の火を意味します。

火の力が重なる干支とされ、勢いの強さや激しき情熱を象徴すると言われて来ました。かつては「力が強すぎて制御できない」「丙午の年は災害が多い」などとされた時期も有りました。現在はどうかと言え、強国の脅威や原子力の脅威が言えます。災害は忘れたころにやって来る。地震雷台風の自然災害や火事や独裁者の狂気が心配の種になります。いずれにしても、浮かれず自分を見失わず状況判断を確実に出来るように普段から備えなければなりません。

本年も皆様のご意見ご投稿お願いいたします。皆様の季刊誌応援宜しくお願い申し上げます。

（小林 国二）